

路翎の初期作品

——主として『飢餓的郭素娥』より——

奥野行伸

0、はじめに

路翎(本名:徐嗣興 1923~1994)は、「七月派」⁽¹⁾に属する作家である。彼の作品『飢餓的郭素娥』は胡風の推奨を受けて1943年1月、桂林南天出版社より単行本として出版された。この作品を読んだ邵荃麟は「私は初めて数章を読んだ後、非常に驚いた。路翎の名前は読者の間ではまだ比較的知られていなかった。私が知っていたことは、彼は二十数歳で、中学さえも出ていない青年であるが、この書の中には、一種の強烈な生命力が充満していたのだ!」⁽²⁾と記している。この評論により『飢餓的郭素娥』の名は文壇で知れわたり、路翎は作家としての地位を得る。その後『中国新文学大系1937—1949』(第六集中編小説巻一)に「飢餓的郭素娥」が収められたように、この作品は路翎の代表作のひとつとなる。

中国当代文学史において、路翎は1955年6月に「胡風反革命集團」の中堅幹部として逮捕されたため、その名は80年代まで文学史上より黙殺されていた。が、近年では『路翎文集』(全四巻・安徽文芸出版社 1995年)が編まれ、研究書もいくつか出版されるようになった。しかしながら、それらの研究⁽³⁾は伝記的、もしくは概説的なもので、多くが『飢餓的郭素娥』以降の作品に依拠しており、個々の作品論に至ってはまだまだ未考察な部分が少なくはないと言える。

さて、『飢餓的郭素娥』には邵荃麟の「強烈な生命力」という評価に見られるように、読者に強い印象を与える人物が登場するが、その登場人物を路翎が如何に描写し、どのように造形していったかについて検討を加えると、若手作家路翎の特色と、胡風の指摘により行われた創作上の工夫とが浮び上がってくる。本稿ではこれらを明らかにするために、路翎の習作期から『飢餓的郭素娥』までに書かれた初期作品と書簡や回想文を手掛かりにして、路翎の初期の創作活動を分析していきたい。

1、 『飢餓的郭素娥』について

中篇小説『飢餓的郭素娥』は全15章からなる。物語は、飢饉のため流浪した果てに、鉾山に流れついた若くて美しい郭素娥(陝南人)を中心に展開される。アヘン中毒者で年上の劉寿春の妻となるが、タバコ売りをするうちたくましい機械工・張振山と出会い愛しあうようになる。都会の紡績工場で働くことを夢見る郭素娥は張振山との逃亡を企てるが、その当夜、劉は妻を土地のごろつきに売りとばす。必死に抵抗する郭素娥は、ごろつきに殴られ、熱湯をかけられ、強姦されて死ぬ。張振山は鉄工所を解雇され郭素娥を迎えに行くが時は既に遅かった。村ではいろいろと噂されたが、春が来ると人々の新しい生活が始まり、次第に忘れられていくという内容で、社会の底辺において貧しくも本能の赴くままに生きようとした女性を描いた作品である。この作品に関して、路翎は作品の構想を胡風宛の書簡に次のように記している。

“郭素娥”，不是内在地压碎在旧社会里的女人，我企图“浪漫地”寻求的，是人民底原始的强力，个性底积极解放。但我也许迷惑于强悍，蒙蔽了古国底根本一面，像在鲁迅先生底作品里所显现的。我只是竭力扰动，想在作品里“革”生活底“命”。事实也许并不如此——“郭素娥”会沉下去，暂时地又转成“卖淫”的麻木，自私的昏卷……。

(「郭素娥」は内在的に旧社会に押し潰された女性ではなく、私が「浪漫的」に求めようとしたのは人民の原始的な力強さで、個性の積極的解放である。しかし、私はその力強さに戸惑い、魯迅先生の作品に現れるような古い国の根本的な一面を覆ってしまったかもしれない。私はただひたすら全力で、かき乱し、作品中で生活の“命”を“改め”ようと思った。事実は決してこのようではなく、郭素娥は沈んで行き、一時的には売春する麻痺となり、一人よがりではんやりした者となったかもしれない。)⁽⁴⁾

『飢餓的郭素娥』では「人民の原始的な力強さ」と「個性の積極的解放」を小説の主題に据えて、郭素娥という「強烈な生命力」を持つ女性主人公を創出しようと試みた。路翎はこのような小説を執筆するにあたり、どのような創作活動を経てきたのだろうか。まず、『飢餓的郭素娥』以前の作

品からその特色を追いかけることとする。

2、『飢餓的郭素娥』以前の創作活動

(1) 習作期の路翎

路翎の文学活動は、1938年秋の散文発表に始まる。1937年に起こった8・13事変以降の日中戦争の激化により、路翎は実家のある南京から継父張継東の故郷、湖北省漢川に避難する。この年は、奇しくも路翎が処女小説を発表することになる『七月』が9月に創刊されている。武漢にも日本軍の手が伸びてくると、路翎は同年12月、漢口で「流亡学生登記処」に登録し、重慶へ向かうこととなる。翌年春には四川中学(後の国立第二中学)に転入し、同級生と文芸社「哨兵」を組織する。その後、路翎自身も新聞に散文などの作品を投稿するようになるのである。ここで、路翎の全文学活動の原点である散文について、一瞥しておく。

路翎の散文が初めて新聞に掲載されたのは『時事新報』1938年11月3日付け文芸欄の『青光』で、「秋在山城」(署名:烽嵩)である。『時事新報』は元々『時事報』という名で、1907年12月5日に上海で創刊され、1911年5月18日に『時事新報』と改名した。日刊で、西欧資産階級の学術や文化の紹介を主要な内容としていた。文学上では、1918年3月4日に増刊した『学燈』(副刊)が有名で、新思潮の宣伝を重要視した。特に、郭沫若は多数の作品をこの『学燈』に発表している。抗日戦争期には重慶に移って発行を続け、1945年9月27日上海に戻って発行、解放直前の1949年5月27日停刊した。路翎はこのような新聞界の老舗というべき『時事新報』を投稿先として選んだのであった。路翎が散文を投稿し始めた1938年は、3月に中華全国文芸界抗敵協会が武漢で成立し、文芸界における抗日活動の気運が高まりつつある一方、戦局は10月25日に武漢が陥落するという困難な状況下におかれていた。そのような中で書かれた散文には、時局の重苦しい状況下においても、国民、特に青少年を励まし鼓舞する色彩が濃く含まれている。

「秋在山城」は、季節が秋となった山城(重慶)において、私は自分の目標と記憶を堅持していこうと新たに誓うのであった。なぜなら、戦時下であるが、この街の一部で繰り広げられている雑然とした行為や遊興に

投ずる者、一時の安逸にひたる者など、人々の墮落した様子を見ていると、私は眩暈をおぼえるからであった。そこで私は“迷夢”から人々の目を覚まさせようとするのであった。このように人々に遠くはない決戦に向かって、闘争的な意志を新たに持つよう呼びかける内容となっている。「秋在山城」は臨時首都・重慶の街の雰囲気にある種の危惧を抱いた青年の心境が描かれると共に、“「史運」的責任”に見られる強い緊張感と未来に向かって闘う意志を暗示して作品を終えている。また、「夜渡」(散文、『時事新報』1938年11月8日・署名烽嵩)は、家を失い故郷をも後にした私は「どこに行くのだろうか?」と物寂しく溜息をついていた。ただ、夜の漆黒の河岸から対岸の灯りが煌きだすと、「行こう…ここで死ぬことは許されないのだ!」と心に希望を抱き、「私を導いてくれ!我々の偉大な祖国は私を庇護してくれるはずだ」と、疎開していく状況下の不安な気持ちを描きながらも、祖国を信じ、祖国のために立ち上がろうとする少年の強い意志が描き出されている。この他にも「高樓」(散文、『時事新報』1938年12月7日・署名烽嵩。)などの作品があり、それらすべては、抗戦期の自身の体験を素材にし、どのような苦難があっても、励ましあって進んで行こうとする人民(少年)の力強さを表出した作品群となっている。これらの執筆活動は思春期に過ごした疎開という苦しい経験を通して描き出されたもので、それらの投稿作品は新聞に掲載された事実が示すように、早熟にして一定水準の文章力を備えているものであった。路翎はこれらの掲載を契機として、本格的に文学への道を歩むことになる。

(2) 処女小説「“要塞”退出以後」

雑誌『七月』は胡風によって1937年9月11日上海で創刊された。『七月』第1号第7期(1938年1月)の社告を見ると、「如民衆活動特寫,抗日英雄特寫,陣地特寫,地方特寫,散文,詩,劇本,小説,通訊,論文,批評,漫畫,木刻等」の作品を求め、抗日戦争の中で文学は育まれ、それが又闘争を成長させるとする胡風の方針により編集された。その編集方針に沿ってか否か、胡風に推奨され、『七月』に載った路翎の処女作「“要塞”退出以後」——一個年輕“經紀人”的遭遇——(『七月』第三集第三期1940年5月)は“陣地特寫”に属する軍隊ものであった。内容は以下の通りである。陣地に「明

日の午後撤退」の命が下り騒然となる。仲買人だった沈三宝は、金主任と二人で機密書類を携えて退却する。その途中日本軍の斥候と遭遇し、初めて銃を撃って敵を殺し、また行動の不可解な金主任を漢奸の疑いありとして殺害する。小隊に合流するが、さらなる撤退命令に違反し逃亡を企てたとして副官に銃殺されるという筋で、軍隊内での運命の非情さが描かれている。

この作品では戦場もの特有の場面展開の速さが目に付くとともに、路翎自身書簡で「私は(人物の)性格を重視した。」⁽⁵⁾と記しているように主人公の心境や心理が緻密に描かれている。その心理の流れを物語の展開に沿ってみていく。まずは、退却前の陣地内における沈三宝の日常に関して、「みなは“仲買人”も兵隊になっていると笑い、“軍隊では商売できないだろう”と笑った時、沈三宝はずっと異様な戸惑いを見せていた。」とある。主人公はずっと商人出身者としての侮辱や嘲りを受け、軍隊内での生活に「戸惑い」を感じていたのだ。また、直属の金主任からは、「お前は商人で“革命理論”から言えば、“資産家”の者はみな“不革命”である。今最も戦闘を妨げているのはお前たちのような“商人気質”でもある！」と、酷評される始末であった。作中、まず初めに主人公が軍隊内において「戸惑い」という悩みを内面に背負っている人物として提起されている。しかも、実戦をまだ経験していない沈三宝は、退却直前に「もし敵と遭遇したら、どうすればよいのだろうか?」「自分は敵を撃つことができるだろうか?」と、不安な気持ちに先に生じてしまう人物であった。

だが退却後、いざ敵と遭遇してみると、不安を抱えて退却していた沈三宝の心境に変化が現れる。

沈三寶現在心里除了沉靜以外還有一種奇異的東西,這種東西拿慾望來解說便是「來兩個敵人看看……」。沈三寶不是白天的沈三寶了.為那些消息惶惑的時候感到自己狼狽,懦弱.後來想逃.但現在卻沉靜了.一個「經紀人」,現在也還是一個「經紀人」嗎?

(沈三宝の現在の心は落ち着きのほかに、ある奇異なものがあつた。それは欲望から解説すると「二人の敵がやって来るのが見えた……」からだ。沈三宝は昼間の沈三宝ではなかった。その知らせによって不安となる時は、自身の狼狽と軟弱さを感じ、それから逃れようと

思った。しかし、今は静かに落ち着いている。あの「仲買人」は今もまだあの「仲買人」であろうか?)

敵の出現を前にして、「不安」「狼狽」「軟弱さ」を感じるはずの沈三宝が、逆に興奮しながらも落ち着きをはらっている。そして、軟弱とされていた商人兵の沈三宝が、敵を前にして銃を持って立ち上がり、日常とは異なるもう一人の沈三宝へと変貌する。この場面に、この小説における重大な心境の変化がはじめて創出されている。加えて、作品では叙述者によって「あの“仲買人”は今もまだあの“仲買人”であろうか?」と読者にたたみ掛けるように問い掛けている。金主任はそのような沈三宝の心境の変化などつゆ知らず「“お前は隠れていればいいんだ 動くな、動くな”と言い、機密文書はすでに金主任自身によって抱えられ、彼は少しもこの“仲買人”を信じなかった。」と、静止するように命令するのであった。退却後も沈三宝を全く信頼せず、兵士として扱わないという侮辱的命令に、沈三宝はとうとう重大な決意を抱くのであった。

現在行動將一種新的啟示落給他——自己並不比任何人低能.而且,自己這一塊料或許有自己底用處吧!

(現在の行動はある種新しい啓示を彼に与えた。——自分は決していかなる人と比べても低能ではない。しかも、たとえ自分というしろものでも、役に立つことがあるかもしれない!)

この「役に立つこともあるかもしれない」という「新しい啓示」に従って、軟弱とされていた仲買人は金主任の制止を振り切って射撃を始めるのであった。このように、仲買人の感情の起伏や心理の変化をこの作品では巧みに描き出している。その後小説では、ついに二人での退却に疲れ果てた沈三宝は機密文書を捨てて退却することを主張する。しかし、金主任からまたも「この商人気質がやはりそのような間の抜けたことをいう」と言って嘲られ、最後は銃のとり出し合いとなり、金主任は撃たれ水田に倒れるのであった。

この作品は、常に「不安、狼狽、軟弱さ」を露呈し、嘲りを受けてきた仲買人が、敵との遭遇を機に勇敢な兵士へと変わっていく様子を描き、作者はその主人公の心に生起する意識の過程を巧みに描き出したのである。この内的世界に焦点をあてて、主人公が形づくられていくプロセス

は処女作の未熟さを感じさせないほど均整が取れていると言えよう。胡風は『七月』に投稿して来た路翎の作品に対して「作者は筆が立ち、自己の特色を持っていると私は思った。」⁽⁶⁾と印象を記している。胡風の言うところの「自己の特色」が何であるかは定かではないが、登場人物を内面から描くという手法は路翎文学の特色のひとつであることは疑いないであろう。

(3) 鉱山ものへ

路翎は「“要塞”退出以後」の創作の経緯について、「実際私はあのような一人の豪気で気ままな商人と出会った。彼は今もまだ重慶にいて、彼は福山で戦い、……(以下略)」⁽⁷⁾と胡風宛書簡に記している。つまり「“要塞”退出以後」は人から聞いた話を題材にし、想像力を駆使して創作した作品であった。この事に関して、胡風は小説を書き始めた路翎に対して「生活において各事情に注意し、形象を蓄積し、書いていくことを堅持しなければいけない。」⁽⁸⁾と述べ、執筆に当たって生活を重視するように諭したとされている。彼は路翎に実「生活」より題材を得るべきであるという創作上の作法というべき指針を与えたのであった。後に、路翎は友人で創作を始めたばかりの袁伯山に宛てた手紙で、「君の周りの生活を見て下さい。」⁽⁹⁾と、自分の周囲から題材を得るように勧めている。このことからわかるように、創作を進めていく過程で胡風からの指摘が路翎にとって教訓的であったことが窺える。路翎はこの胡風の教えに従い、自分の身近にある生活を作品の題材に取り入れていく。

1940年10月、継父である張継東(国民政府經濟部主計処職員)の紹介により、路翎は重慶北碚の後峰岩經濟部鉱冶研究所会計室に就職する。そして、鉱区での体験を題材にして執筆活動を続ける。物価高騰に付け込みひと儲けしようとする拝金主義の大家と闘うボイラー工・金仁高を描いた「家」(『七月』第6集第3期1941年4月)や、進学か祖父の仕事を受継ぐかで苦悩する少年を描いた「祖父底職業」(『七月』第7集第1.2期合刊1941年9月)、また、戦争で家と故郷を失い、当てもなく彷徨う鉱夫を描いた「黑色子孫之一」(『七月』第7集第1.2期合刊1941年9月)などを次々と発表する。これらの作品は、鉱区を題材にして、社会の底辺で暮らす人々

の生活を描いたものであり、「黒色子孫之一」の次に発表した『飢餓的郭素娥』も同じく鉱山ものに属する作品である。この節では胡風が「この作品は第一作（“要塞”退出以後）」に比べてかなり成熟していた。」⁽¹⁰⁾と評した「何紹徳被捕了」（『七月』第6集第4期1941年6月）を取り上げる。

敗残兵の何紹徳（河北人）はある鉱山の街で、農家出身の魅惑的な娼婦・錢蓮金と出会う。蓮金への思いを募らせ、ついに彼女に告白しようとした日、蓮金が“租客”の楊承倫と会っているのを見て動揺し、本心を告げられず失意のうちに立ち去る。後に蓮金が楊承倫に金で買われた内縁の妻であるとわかると、何は蓮金を連れてほかの街で暮らそうと試みる。が、楊に密告され軍官に捕まるのであった。以上が「何紹徳被捕了」の梗概である。

この小説の主人公・何紹徳は「陰気」で常に不満な表情を浮かべる悲観主義者として登場する。その彼を一ヶ月間、不可思議な愛情と腹立たしさによって惑わせるのが運命の女・錢蓮金であった。何紹徳は錢蓮金に恋焦がれるものの、何の取柄もない自分とは上手くいくはずがないという悲観的思考と、彼女がほかの男に抱かれることに我慢できないという苦悶から彼自身の心の葛藤が起こる。この何紹徳の内面で繰り広げられる愛憎劇によって話は展開されていく。その後、何紹徳は錢蓮金と親しくなると街からの脱出を試みるが、密告により物語は思わぬ結末へと導かれる。

「何紹徳、你拿去；你逃走，…」

何紹徳は愈發憤怒了，但是，當「逃走」這兩個字從蓮金底嘴唇里迸出來的時候，他心底尖銳的矛盾底痛苦突然解決了。他不再想到要逃走了。（「何紹徳、もって行って；逃げて，…」

何紹徳はますます憤っていた。が、「逃げて」この言葉が蓮金の口よりほとばしった時、彼の心に鋭く矛盾していた苦痛が突然溶解した。彼はもはや逃げようとは思わなかった。）

この一文は錢蓮金が何紹徳の命を気遣って叫んだことにより、かえって何紹徳が逃亡を諦めた場面である。楊承倫の密告により何紹徳が軍官に捕まりそうになり、正に彼が運命の瀬戸際に追い詰められた時、最愛の人の真心を得たのだ。自分の為にか懸命に叫ぶ錢蓮金の姿を見て、何紹

徳はその気持ちと引き換えに、敗残兵としての逃亡生活に終止符を打ち、追っ手に捕まることを決意するのであった。題名の由来ともなったこの結末では、蓮金を愛することと、それによって生ずる腹立たしさという二律背反ともいうべき「矛盾」した「苦痛」から解放され、愛に満たされた男の心理を切れ味鋭く印象的かつ象徴的に描いている。

路翎は就職後、鉱山区での体験をもとにしながら、この作家の特色のひとつとも言うべき「人間の内面を描くこと」を創作の柱において執筆を続けるのであった。

3、主人公・郭素娥の造形（他者の内面より描く）

以上『七月』に掲載された作品において、主人公の内面を描き出すことに路翎文学の特徴があることをまずはおさえた。本章では先の作品群とは異なる内面描写によって主人公・郭素娥の人物像が形づくられていることについて考察を試みる。

『飢餓的郭素娥』は叙述者の語りによって物語が進んでいく三人称小説である。路翎は“要塞”退出以後よりこの三人称のスタイルを用い、叙述者が主人公の心理を物語る作品を発表してきた。『飢餓的郭素娥』においても、基本的には同様の作法で書かれているが、主人公・郭素娥に関する形象の方法には些か差異が認められる。その点について、まず張振山と郭素娥が一夜を共にした後の場面より検討してみる。

“穿上你的裤子吧。”

“你是哪里人？”郭素娥突然问。

“问家谱吗？江苏。”他重重地跃下床来。

“你现在好多钱一个月？”

“没有打听过吗？”擦擦了一下手掌之后他又问，用一种粗暴的声调，“你要钱吗？”

“我——要！”郭素娥同样粗暴地，怨恨地回答。

张振山惊愕地耸了一耸肩膀。他没有想到他会遭到这样的敌手，他没有想到郭素娥会有这样的相貌的。当郭素娥向他叙说她的热望的时候，他避开她的真切，认为只要是一个女人，总会这么说；但是当她怨恨地，以一种包含着权威的赤裸裸的声调说出“我——要”来的时候，他却惊讶，

以为除了婊子以外,一个女人是决不会这么说的了。而郭素娥,能够坦白地怨恨和希冀,能够赤裸裸地使用权威,决不是妓女,是明明白白的事。

「お前、ズボンを穿けよ。」

「あなたはどこの人？」郭素娥は突然訊ねた。

「家系のことかい？江蘇だ。」彼はどしんとベットから降りた。

「あなたは今一ヶ月いくら稼いでいるの？」

「聞いてなかったわけじゃないだろ？」手のひらを擦った後、彼は荒々しい声で又訊ねた。「金がほしいのか？」

「私は――ほしい！」郭素娥は同じように荒々しく憎々しげに答えた。張振山は驚いて肩をすくめた。彼は自分がこのような相手と出会うとは思いつかなかったし、郭素娥にこのような姿があるとは思いつかなかった。郭素娥が彼に自分の熱い欲望を述べた時、彼は彼女の真剣さを避けつつ、ただ一人の女であれば、いずれこのように言うであろうと考えた。が、彼女が憎々しげに、ある脅しを含んだあけすけな声で、「私は――ほしい！」と言った時、彼は驚いた。娼婦以外に一人の女がこのように言えるはずがないと考えた。しかしながら郭素娥は率直に恨むことと請い願うことができ、赤裸々に脅しを用いることができ、決して娼婦でないことは明々白々なことであった。) ⁽¹¹⁾

張振山は郭素娥と同じく流浪の果てにこの鉦区に來た無頼漢である。出身は江蘇省で、機械工や新聞売りなど次々と仕事を変えながら、日中戦争の激化に伴い都市を転々としつつこの内陸部の鉦区にたどり着いた。機械工として腕が立ち、男らしい荒々しい性質を兼ね備えた張振山は仲間内から兄として崇められる存在であった。その張振山がただ遊び半分に付き合っていた女性は、娼婦とは異なり「率直に恨むことと請い願うことができ、赤裸々に脅しを用いることができ」といった複雑な表情を潜ませるのであった。その具体例として、郭素娥は張振山といっしょに都会へ向かうという精神的飢餓から生じた希望を語るだけでなく、女性として言い辛いであろう物質的飢餓を脱するための要求を容易に願い出ることができる力強い女性であった。この場面では、主人公と逢引し俠氣

に飛んだ張振山の内面に生まれた驚きを叙述者が物語ることによって、女性主人公の強烈な人物像が浮き出てくるように描かれている。つまり、郭素娥の造形について、叙述者が直接物語中で主人公を語るのではなく、ほかの登場人物の内面を語ることによって主人公が間接的に形作られる方法で描かれているのである。本作品ではこの他にも、農家の少女が郭素娥の幸せを読み取る光景や、隣人が郭素娥の生活の苦しさを物語る場面など他者からみた主人公像が描かれている。ここでは張振山という無頼漢の内面を読み解くことで、読者は脳裏に郭素娥という女性主人公の力強さをも形成させていくのである。このような女性と出会った張振山は、

对于饥饿的郭素娥,他是带着他的全部的狠毒走近去的;对于女人的命运,在起初,他是漠不关心的。他没有要知道这个女人在想些什么的愿望,更没有要和这个女人维持较长久的关系的愿望。但在今天,在这个骚乱的夜里,女人显露了自己,而且强有力地使他承认这显露的真诚,使他承认,不管两个人的生活境遇怎样不同,她是他的值得同情的敌手。(飢えた郭素娥に対して、彼はあらゆる悪辣さを帯びて近づいたのであった。女の運命に対して、初めはさっぱり関心がなかった。彼はこの女が何を思っているか知ろうとする願望はなく、さらにこの女と比較的長い間関係を保とうとする願いもなかった。だが今日、この騒乱の夜、女は自分をはっきりと露呈し、しかも力強く彼にはっきりとした誠を認めさせ、二人の生活の境遇がどんなに違っていても、彼女は彼の同情に値する相手であることを認めさせた。)⁽¹²⁾

と、心の支えとなるべき女性として郭素娥を認め、恋い慕うのであった。

路翎は前五作品において、主人公の内面を描くことに力点を置いてきた。だが『飢餓の郭素娥』では叙述者による主人公の内面を物語る手法を極力抑え、登場人物の心理変化を踏まえながら、主人公の人物像を作り上げて行くという描き方が用いられている。先の引用文では、読者に張振山の心境の変化を匂わすことで、郭素娥の「強烈な生命力」を帯びた人物像を印象付けるように技巧上の工夫が凝らされている。胡風は『飢餓の郭素娥』の特徴について、「物語の経過だけを表す繡像画の線でなく、特

技な表情を映し出すだけの木炭画の線でもなく、油絵のように複雑な色彩と複雑な線とが融合し、筋肉一本一本の表情と一つ一つの動作に秘められた深みと立体性を表現することができている。」⁽¹³⁾と評している。絵画を例とした抽象的な評価である。この指摘に沿って論者なりに換言すると、叙述者が直接主人公の心理を語るような単純な手法ではなく、張振山の内面を通して主人公・郭素娥を描くことにより、「秘められた深みと立体性を表現することができ」と考えてもよいであろう。この作品では張振山の内面描写に、技巧上の際立った特色があり、前出の『七月』に掲載された作品群にはない創作上の工夫を探ることができる。

このように路翎は主人公の内面を描写するという手法だけでなく、作中人物の内面を描くことによって、主人公像を生じさせる新たな表現手段をも用いている。この描き方の変化により、読者はより複合的に「強烈な生命力」をもった主人公像を造形させていくのである。この点が、路翎の初期作品において看過できない大きな特徴のひとつである。

4、 創作の道標

話を文壇登場以前に戻す。路翎は雑誌『七月』への投稿を通じて胡風と知り合った。その契機となった書簡は胡風宛1939年4月24日付で、路翎は「妈妈的苦难」という作品を送り、「これはただ私の勉強の道標にともくろんだだけのことで、もし『七月』に何か差し障わりがあるようでしたら、どうか発表しないで下さい!」⁽¹⁴⁾と、胡風に作品の可否を仰いでいる。この作品は結局掲載されることはなかったが、路翎の文章は胡風の目に留まり、路翎は翌40年5月『七月』に「“要塞”退出以後」が掲載され、文壇デビューを果たす。その後、数編の短編小説執筆を経て、中篇小説『飢餓的郭素娥』が出版され、作家の地位を不動のものとする。小説創作における「道標にともくろん」で始まった胡風との師弟関係は、この出版により一応の到達点にたどり着いたと言えよう。

本章では、『七月』に掲載された小説に関する胡風からの指摘が『飢餓的郭素娥』の創作にどのように活かされたかを考察する。実際、どの範囲まで胡風の指摘、指導に基づいて作品が出来上がっていったか知る由も無いが、書簡や回想録を通してできる限り追ってみたいと思う。特に主人

公郭素娥の造形に関わる文章表現等を「道標」というべき胡風の指摘に従って、作品上如何に反映させていったかについて検討を加える。

(1) 環境描写

『飢餓的郭素娥』の時代背景は1930年代後半である。1923年に南京で生まれた路翎は、実父の趙樹民が一歳の時に他界し、母方の伯父徐錫潤の養子となるものの、路翎二歳の時に養父も亡くす。その後、母・徐菊英が湖北漢川出身の張継東と結ばれると、路翎も継父に扶養されることとなる。中学入学まで南京で過ごす、1937年の8・13事変後、一家は継父の故郷、湖北省漢川を経て、同年12月には重慶へと落ち延びて北碚に至る。この時期、疎開先の重慶及びその周辺地域は各地から避難民が押し寄せ、社会環境も大きく変化していた。⁽¹⁵⁾その頃の内陸部の鉱区を題材にしている「黒色子孫之一」(41年9月)を読んだ胡風は「“周囲の環境描写”が些か不足しているようだ」⁽¹⁶⁾と、路翎に語ったとされている。確かに「黒色子孫之一」では、登場人物が労働する鉱区や飲み屋の様子などが描かれているが、「周囲の環境」までは詳細に描き出されていない。この点に関して『飢餓的郭素娥』では、例えば、炭鉱会社が宿舍不足の為、農家所有の民家を借りてそこに労働者が行き交うといった場面などがあり、創作上の変化がみられる。ここでは、都会の紡績工場で働くことを夢見る郭素娥にとって、周りの環境の変化があたかも自身の未来への窓口のように映る、その心理を描き出している箇所を引用してみる。

四年前、工厂在原来的土窑区里，在山下面建立了起来，周围乡村的生活逐渐发生了缓慢的波动，而使这波动聚成一个大浪的，是战争的骚扰。厌倦于饥谨和观音泥的农村少年们，过别一样的生活的机会多起来了。厌倦于鸦片鬼的郭素娥，也带着最热切的最痛苦的注意，凝视着山下的嚣张的矿区，凝视着人们向它走去，在它那里进行战争的城市所在的远方走去。

(四年前、工場は元々の土窑区山の麓に建てられ始めると、周囲の農村の生活はしだいに緩やかな波が発生した。そして、その波を一つの大波にさせたのは、戦争の騒乱であった。飢えと観音泥に飽き飽きしていた農村の若者たちは、ちがった生活をする機会が多くなっ

ていた。鴉片中毒者に嫌気をさしていた郭素娥も最も熱烈で最も苦痛な関心を持ちつつ、山の麓の騒々しい鉦山区を眺め続け、人々がそこに行き、戦争が行われている町の遠方へ行くのを眺めていた。)(¹⁷)

細やかに周辺の様子が描かれている。また、鉦山区の農村の生活は戦争によって一変した社会環境を窺わせる描写となっている。アヘン中毒者との生活から出路を求め周囲を見回している郭素娥は、この時代及び社会環境の変化という鼓動を受けて、いつかは街へ出て働くことを望む女性として描かれている。このように社会環境の変化を描くことで、都会で新たな生活を送りたいという自我の解放に繋がる郭素娥の夢も、読者に暗示させる描き方となっている。巧みな環境描写で周囲の状況を語るだけでなく、自我の解放という郭素娥の夢も同時に描き出しているのである。

(2) 魏海清について

次に主要登場人物の描写技巧をみる。胡風は「家」(41年4月)を読み、「主人公の周囲の人物について、もう少し描けていれば良い。あの北方の“ゲリラ区”から来た“河南人”で、主人公の友人が描写できていればすばらしい」(¹⁸)と述べたとされている。主人公の周りにいる登場人物の描写の弱さ、人物紹介の不足があることを指摘している。例えば、その該当部分と思われる箇所を「家」より引用してみると、

「這是咱們的老朋友，新從河南日本人底下跑出來的，請你幫忙相右邊樓底下的房子。」鍋爐工人說，被介紹的河南人點一點頭，——他底結實的身體有些粗蠢，他底左眼珠似乎有毛病的眼睛閃亮着一種頑強的光。

(「こやつは我々の親友で、新しく河南の日本人の下から逃げ出してきたばかりのやつです。どうか右下の部屋を貸してやって下さい。」とボイラー工が言うと、紹介された河南人はうなづいた。——彼のがっしりした身体はややがさつで、彼の左の眼球は少し癖のある、ある頑強な光をきらめかしていた。)

とあり、ボイラー工・金仁高の友人が突然物語に登場してくるが、前後に詳しい人物紹介などは書かれていないといった調子である。また「黒色子

孫之一」(41年9月)においても、主人公・金承徳の友人となる何連は、石炭を積みおろす場面で突然登場している。要するに、これらの人物描写には物語における主人公との因果関係を読者に知らせる描写が欠如していると言えよう。だが、この周辺人物の描写について『飢餓的郭素娥』では工夫の跡が見受けられる。その例証として、ここでは郭素娥の夫の遠い親戚で、ひそかに郭素娥を愛している魏海清の人物造形について検討を加える。彼は張振山と敵対し、郭素娥の不貞を夫に吹き込む。それにより郭素娥は売り飛ばされ、拷問を受け殺されてしまう。魏海清は拷問に加わったごろつき黄毛に抗議するが、そのうち喧嘩となり魏海清も殺されるのであった。この人物に関して、まず物語で魏海清という人物の名前が初めて登場する場面から取り上げる。

“唉,你知道,魏海清在弄她”

“魏海清是谁?”

“土木股的呀!本地人,死了老婆,……那是一个狗种。”

(「オイ、お前知っているか、魏海清が彼女にちょっかいを出しているぞ」

「魏海清とは誰だ?」

「土木課のやつだ!地元の奴で、女房は死んだ。……あいつは犬だ。」)

(19)

初めに、魏海清は「郭素娥にちょっかいを出している」獣(犬)として、張振山の仲間内で噂される形で作中に登場する。次に、主人公・郭素娥にとって魏海清とはどのような人物であるかが提起されている。

另外还有一个自己向她诚实地飘过来的人。这就是魏海清。这个人是她的丈夫的极远的表亲,从前也佃地种,但在四年前死了女人之后,不久,地被主人无理地收回去了,自己带着刚刚五岁的小儿子到矿里土木股来当里工了。三十几岁,有着端正而晦涩的脸孔,是一个呆板而淳厚的人。他和郭素娥,是一向就保持着简单,拘谨,而且隐匿的亲密的;显然的,郭素娥,尤其当他投到工厂里去之后,是十分注意他的。

(その他に、さらに自ら郭素娥に向かって誠実にやって来た人物がいた。それが魏海清である。この人物は彼女の夫の遠い父方の親戚で、以前は小作農をしていたが、四年前、妻を亡くしてから間もなく、地

主に理由も無く土地を取り上げられて、自分は五歳になったばかりの息子を連れて鉦区の土木課に来て内勤となった。30過ぎで、端正で気むずかしい顔をしており、融通の利かない純朴な人物であった。彼と郭素娥はずっと、単純で、めりはりの利いた且つひそかな親密さを保っていた。明らかに郭素娥はとりわけ彼(張振山)が工場に身を投じた後はひどく気になっていた。)⁽²⁰⁾

郭素娥に近づく魏海清がいかなる男かが、ここでは存分に記されている。その性格「融通の利かない純朴」さは、後の物語で郭素娥と彼の運命に大きな影を落とすこととなる。このように魏海清なるものについて十分語られたあと、やっと魏海清本人が登場するのである。以下の引用文は魏海清と郭素娥が作品中で初めて会話する場面である。

魏海清沉默着,在这之间,恢复了镇定。

“和你说话!”他威胁地说。

“说什么?”郭素娥敏捷地跃出一步,严厉地问。

魏海清什么也没有想地沉思了一下,望着女人的颈子,说:

“你知道,张振山那家伙不是好东西……”

“怎样?”

“他仗势欺人,是个流氓。你要当心……”

(魏海清は沈黙しその間に落ち着きを取り戻した。

「あんたにちょっと話がある!」彼は脅かすように言った。

「何なの?」郭素娥はすばしこく一步飛び出し、厳しく尋ねた。

魏海清は何も考えずにちょっと沈思し、女の首を眺めながら言った。

「あんた知っているだろう、張振山の奴はろくなもんじゃねえ……」

「どんな風に?」

「奴は勢力を嵩にきて人をいじめるごろつきだ。気をつけな……」

(21)

張振山に対する嫉妬から生じた「融通の利かない純朴」な気持ちと、不貞な行為を毛嫌にする「誠実」な感情とが呼応して、魏海清は我慢しきれず郭素娥に直接忠告した場面で、魏海清という人物の性格を率直に描き出している。

上述してきた魏海清という人物を段階的に描き出す手法は、物語に伏線を張るという技巧上の仕掛けであり、それが作品上において巧みに設けられている。この手法により、読者は先に魏海清の印象を知らされ、後の彼の行動について納得するように創作上の工夫が凝らされている。こうした設定は先行する作品で見られることはなく、この新しい表現方法によって主人公との因果関係をただ紹介するだけでなく、登場人物の造形化にも成功しているのである。

ここで、作品における魏海清の人物像について触れておく。先述したようにこの後、魏海清の行動は物語の展開に大きな影響を与え、郭素娥の運命をも左右してしまう。魏海清の、現実の生活を望ましいものにしようとする堅実さと、「融通の利かない純朴」さという性格とが呼応して、彼は劉寿春に郭素娥の不貞を告げる。それにより、郭素娥は命をも落としてしまう。このような「純朴、誠実」さを性とし、農民特有の凡人というべき堅実さを持ち合わせた魏海清は、流浪の果てこの地へ辿り着き自我の解放を試みようとしている郭素娥とは、性格、希望、生き方ともに相対する人物である。作品中、郭素娥は魏海清を「彼は役立たずの愚か者で、地面を這うのがうまいだけよ」⁽²²⁾と述べているように、彼女は魏海清をただ愚かな農民として捉えている。作者が創作上求めた主人公像は「人民の原始的な力強さ」と「個性の積極的解放」であった。そのことを作品に際立たせるために、小説では不器用ながらも純朴に生きる土着者(魏海清)の消極性を明示することによって、流浪者(郭素娥)の積極性が相対関係になるように構成されている。この相対関係は、主人公の周りにいる魏海清の消極的な性格が際立てば際立つほど、かえって郭素娥の積極的な性格が浮び上がってくるという技巧上の効果が凝らされていると思われる。『飢餓の郭素娥』では、主人公の造形化において魏海清の性格描写と張振山の内面描写とが大きな柱となっているのである。

(3) 精神的奴隷からの解放

最後に主人公郭素娥に迫る。『飢餓の郭素娥』の前作「黒色子孫之一」(41年9月)は、戦争で家と故郷を失い、当てもなく彷徨う鉱夫が自殺して幕を閉じるという内容である。この作品に関して、胡風は「人民自身の精神

的奴隷ともいうべき傷跡に関して、読者に与える圧迫感がある。」⁽²³⁾と指摘している。それに従ってかどうか定かではないが、『飢餓的郭素娥』では、読者が読後に感じる重苦しさを避けるため、主題に「人民の原始的な力強さ」と「個性の積極的解放」を据えて物語を創作している。だが『飢餓的郭素娥』においても、人民に与える「精神的奴隷ともいうべき傷跡」と言った重苦しい箇所はある。それは例えば、郭素娥が劉寿春との生活に疲れ、溪谷の風景を眺める場面などもそうである。

在这峡谷里,在这重压着它的苦重的暗影在她眼前浮幻着黄色的晕圈,又爆耀着墨绿色的星花的下面峡谷里,在这夜深寂寞,流荡着黑暗的冷风,仅仅模糊地闪着水田的淡水的峡谷里,是充满着她的骚乱,痛苦,悲凄地逗引情欲的遥远的记忆。

……七年前,一个外省的军官在这峡谷里引诱了她。

(この谷間には、重く押し掛かる重苦しい暗い影が彼女の目の前で、黄色く薄暗い輪となって浮かび、さらに鉄色の火花が乱れ輝いている谷間で、夜更けは寂しく、真っ黒な冷たい風が揺れ動いており、わずかにぼんやりと水田の淡い光に輝いている谷間には、彼女の鬱積と苦痛が充満し、もの寂しく欲望のはるか遠い記憶を誘い出した。

……七年前、ある外省の将校がこの谷間で彼女を誘惑した。)⁽²⁴⁾

郭素娥の「鬱積と苦痛が充満し」ている暗い一面を、巧みな情景描写を用いて表現している。そこでは遠い過去に対する記憶も語られている。可視的な情景に心情を語らせる描き方は、郭素娥の日常をただ語るだけでなく、遠い過去をも再現している。作品中ではこの将校との話はこれ以上語られない。では、七年前の話は何を意味するのか。この遠い記憶より、奴隷ともいうべき日々の生活に精神的苦痛を抱き続ける女性と、ただ肉体的情欲を満たすために女性を支配したいとする男性との不均等な男女関係の構図が、現在の劉寿春との生活に加えて、以前にもあったことを婉曲的に想起させているのではなかろうか。先行する作品で、路翎の描いた女性登場人物は皆社会の底辺で生きる弱者であった。例えば、「家」では、木賃宿の大家・劉耀庭の妻は、農家から金で買われた15歳の少女で、物語では「黒花猫」と共に登場し、男の従属者の印象を与えている。「祖父底職業」では、浮浪者として登場する少女、小黑三。「何紹徳被捕了」

の錢蓮金も劉耀庭の妻と同じように農家から金で連れて来られた女性で、「黒色子孫之一」に登場する石二の妻は“飢えた鼠のような”と形容されるように社会的弱者であった。『七月』の諸作品にみられる女性のほとんどが男に頼らざるをえない受動的な者ばかりである。作者は『飢餓的郭素娥』で、この精神的奴隷の世界から脱け出し、個性を積極的に解放するという企図の下、鉅区の下層社会で暮らし旧社会からの従属的形態におかれている女性を初めて小説の主人公に据えた。そして『飢餓的郭素娥』の原題が「恋愛的小屋」⁽²⁵⁾であったように、自我の解放を試みる為に、恋愛という手段を用いて物語を創出していく。この手法により、作者は精神的に圧迫されている女性の暗い一面ばかりを描くのではなく、恋愛を通して従属的関係を断ち、都会でのより良き生活と自由を夢見る女性の明るい一面を表出したのである。人間が愛し合うという原始から脈打つ本能的行為を存分に描き出すことで、「人民自身の精神的奴隷ともいふべき傷」に立ち向かおうとする力強い女性、郭素娥が造形されたと考えられる。

以上、『飢餓的郭素娥』は「道標」とも言うべき胡風の指摘を頼りに、先行する小説において不足していた文章表現や主題性を模索し、新しい創作方法を開拓して登場人物の造形化に成功した作品である。『飢餓的郭素娥』は、路翎の小説修養における初期段階の試みを集大成した力作であると言える。

5、 おわりに

『飢餓的郭素娥』は戦争の激化により内陸部に避難し、鉅区で職に就いた路翎の体験を生かして書かれた作品である。よって作中では流浪民及びそこで暮らす人々の複雑な生活が浮き彫りにされている。初期段階の路翎文学の特徴は、登場人物の内面を描くことに大変習熟していた点がまず挙げられ、特に『飢餓的郭素娥』では、他者の内面を描くことにより女性主人公を造形させていった点が挙げられる。また、自身の創作上の弱点は胡風の指摘によって、1、「環境描写」2、「主人公の周囲の人物」3、「精神的奴隷からの解放」といった不足している文章表現を補ったのであった。これらは木の構造に例えるなら、前者は幹の部分であり、後者は枝

や葉であると言えよう。こういった工夫を重ねたことによって、力強い女性主人公が創られた。正に『飢餓的郭素娥』は路翎文学の成立過程を示すのに欠かすことのできない作品のひとつと言える。この作品の出版により路翎は文壇で名を確立し、作家として活発に創作活動を行っていく。が、1955年6月、“胡風反革命集團”の“骨幹分子”として逮捕される。『飢餓的郭素娥』は約15年間という短い作家活動の事実上の起点となる作品である。

付記：本稿で引用した『七月』の小説は、すべて『七月』復刻版に拠ったことをお断りしておく。

<注>

- (1) 胡風が抗日戦争期に、雑誌『七月』を編集し文芸界の抵抗を組織、多くの新人を育てた。そこに投稿した新人を称して『七月派』という。他の小説家に丘東平、彭柏山等がいる。
- (2) 邵荃麟「飢餓的郭素娥」 所収 魏麒麟等編『路翎研究資料』北京十月文芸出版社 1993年 63頁。初出：『青年文芸』第1巻第6期 1944年。
原文：当我初读了几章之后，非常吃惊。路翎的名字在读者中间还是比较陌生的。我所知道的，他是一个二十几岁，连中学都不曾读完的青年，但是这本书里却充满着一种那么强烈的生命力！
- (3) 改革開放後の研究書としては、
劉挺生著『一個神秘的文学天才 路翎』華東師範大学出版社 1991年。
朱珩青編『路翎』三聯書店(香港) 1994年。
朱珩青著『路翎伝』大象出版社 2003年。
等があり、日本では以下の論文、作家紹介等がある。
相浦晃「一九五三年八月——現代中国文学の動向」『現代中国』第29号1954年。
竹内実「胡風と路翎」 所収『中国の同時代の知識人』合同出版 1967年。
近藤龍哉「もう一つの『両地書』」『東方』182号 1996年
鷺巣益美「路翎の『飢えた郭素娥』に関する一考察——後の作品に与えた影響について——」明海大学教養論文集 No13 2001年。
山田芳明「路翎与厨川白村」『文化女子大学紀要、人文・社会科学研究』2002

年。

- (4) 路翎著『致胡風書信全編』大象出版社 2004年。胡風宛1942年5月12日付書簡

*この書簡は胡風の「『飢餓的郭素娥』序」に一部が引用されており、文中字句の異同が認められる。異同箇所は「浪漫」の部分が「浪費」と記されている。本稿では『致胡風書信全編』に拠った

- (5) 同上、胡風宛1939年9月28日付書簡。

原文：寄上《“要塞”退出以后》一篇。对于这篇东西我想解释一下：

这里所写的要塞是福山要塞，而那些XX，XX是江阴，昆山……一些地方。实在情形，这个要塞是这样陷落的。但这并不重要。我拿出我的勇气来写这个青年底“经纪人”。我正视性格。

- (6) 『胡風全集』第7卷「回憶錄」4“重慶前期” 湖北人民出版社 1999年474頁。

原文：路翎寄稿来时用的是流烽的名字。我觉得作者很能写，并且有自己的特色，回信对一些不足之处提了些批评意见，他改了以后，名字也改成了“路翎”。约来见面以后，简直有点吃惊；还是一个不到二十岁的小青年，很腼腆地站在我面前。我赶快请他坐下，很随便地和他谈着。慢慢地，他习惯了，就和我谈了许多他的经历和一些看法，想不到小小年纪已有这多的经历。他年轻，淳朴，对生活极敏感，能深入地理解生活中的人物，所以谈起来很生动。

- (7) 前出、『致胡風書信全編』胡風宛1939年9月28日付書簡。

原文：实在我碰到这样一个很豪气很随便的商人。他现在也还在重庆，他在福山战斗过，但我写出来却不同了；我底人物死去了——这或许是在创作过程上掺入一种想象的因素吧。但这却也是基于“环境”的，在里面我发生许多矛盾，老实说，我也并没有将这些矛盾统一地克服……这个人物写成这样而且死去了。也许是没有写出来吧。

- (8) 路翎著「我与胡風」所収：晓風編『胡風路翎文学書簡』安徽文芸出版社1994年。1頁。

原文：在生活里要注意各种事情、积蓄形象，坚持着写下去；有时产生困难了，“不妨放一放”，但写作和在生活里吸收营养一样，是要经常坚持的。

- (9) 「路翎到友人書信」1944年7月3日袁伯康宛書簡 『新文学史料』人民文学出版社 2004年第4期。

原文：你所接触的生活，并不如此之小，所谓生活报告，是要写社会，写人群，即使写自己，也要反映社会与人群。所谓尊重人物，就是要多多思考，深入内心的意思。你往往写得潦草，这不好的。要深沉，要多思考。看看你的周围的生活罢，你的周围是很大的呀。同时，多看，多想。不要急急地写出来。

- (10) 前出『胡風全集』第7卷「回憶錄」4“重慶前期”湖北人民出版社 1999年485頁。

原文：上次的一篇我已看过并提了意见，这次是修改稿，并且还带了一篇新写的一、两万字的小說《何紹德被捕了》。他已在我住处附近的白庙子天府煤矿公司做了一名小职员，闲时就写小说，写他生活中所看到所体会到的，所以这篇比第一篇成熟多了。

- (11) 路翎著『飢餓的郭素娥・蝸牛在荊棘上』 人民文学出版社 1988年 13頁。

- (12) 同上、18頁。

- (13) 胡風『飢餓的郭素娥』序 初出：『飢餓的郭素娥』1943年 初版 希望社。
所収：『路翎研究資料』北京十月文芸出版社 1993年 61頁。

- (14) 前出『致胡風書信全編』 胡風宛1939年4月24日付書簡。

原文：这只算做我学习的一个路碑罢了，假如对于《七月》有什么“妨碍”的话，请不发表吧！

- (15) 例えば、路翎は「二摩論」(署名未明『時事新報』1939年2月20日)で都市の急速な近代化で生じる「摩登」化とそこで生じる「摩擦」の問題を記した雑文を発表している。また、老舎の「八方風雨」「十一 在北碚」では路翎の就職先“北碚”の発展の様子が記されている。(『老舎全集』第14巻 人民文学出版社 1999年 399頁)

- (16) 前出、「我与胡風」『胡風路翎文学書簡』 4頁。

原文：他在看了我的小說《黑色子孙之一》之后说，“不错，挖掘出了人物的形象，但是，有几个地方，‘模糊’了一点，而‘周围的环境的描写’，似乎仍然有点不足。”

- (17) 前出、『飢餓的郭素娥・蝸牛在荊棘上』 10頁。

- (18) 前出、「我与胡風」『胡風路翎文学書簡』 4頁。

原文：他曾在看了我的小說《家》的原稿之后说：“就这样吧！可以了，但主人公周围的人物，要在多写一些便好了，那个从北方‘游击区’来的‘河南人’，主人公的朋友，能多一些描写也好。”

- (19) 前出、『飢餓的郭素娥・蝸牛在荊棘上』21頁。

- (20) 同上、27頁。

- (21) 同上、29頁。

- (22) 同上、64頁。

- (23) 前出、「我与胡風」『胡風路翎文学書簡』4頁。

原文：他后来曾说，这一篇，关于人民身上的精神奴役创伤，有着给读者的压力。

(24)前出、『飢餓の郭素娥・蝸牛在荊棘上』33頁。

(25)前出、「路翎到友人書信」1942年2月9日聶紺弩宛書簡 『新文学史料』。